

第148号

平成14年1月

E-mail : © 2002  
shimz@mb.infoweb.ne.jp  
LDG04167@nifty.ne.jp

# SCだより

編集 発行 人

清水 吉男

(株)システムクリエイツ

横浜市緑区中山町 869-9

電話 045-933-0379

FAX 045-931-9202



13回め



MENU

- 特製ブレンド 380
- レモンティー 350
- 白替りケーキ 300
- ぶるせす 無料

アルコールは置いていません

新聞によると、IT関連のソフト会社が、木枯らしで枯れ始めたようだ。もともと、経営基盤が弱い上に、戦略も甘いのだろう。技術はあっても、それだけで「起業」が実現するわけではない。たとえ、新たな需要を起こすとしても、その見通しをつけてからでないとい、本番の幕を開けることはできない。折角のアイデアも、立ち上げに失敗したのでは、次が続かなくなってしまう。新聞を見ながら、また一人でつぶやいている。



「おはよう」と威勢よく、いつもの2人連れが入ってきた。この2人は、ソフト会社のエンジニアではなく、メーカーのエンジニアで、よく入社前に立ち寄りていく。会社は、もう少し先を左に曲がった所のビルにあるようだ。

「いらっしやい」  
2人は、カウンターの手前に席をとって、端に積み上げた灰皿を寄せた。定位置である。  
「ブレンドでいい？」  
「うん、2人ね」といって、2人で身体を少し向き合うようにして、何か話した。何だか、面白くないことがあったようだ。

コーヒーの香りが店中に広がっていく。この瞬間が何とも言えない。  
と、そのとき、ドアが開いて、  
「おはようございます」と一人の客が入ってきて、窓際のテーブルの方に向かった。  
「いらっしやい」と声を掛けると、こちらを向いて軽く挨拶を返してきた。実に上品な客である。  
席に座るのを見計らって、グラスにミネラルウォーターを入れてカウンターを出した。  
「外のドアの所の花がきれい、つい引き寄せられてしまいました」と。その客は言った。  
「そうですか、ありがとうございます。どうぞゆっくりして行ってください」といって、注文を聞いてカウンターに戻った。

ちょうど、カウンターの2人のコーヒーが出来たところで、薄い水色のカップに注いで、2人の前に差し出した。  
「ねえマスター、プロセスの改善って、必要になったときに取り組めばいいの？」と藪から棒に切り出してきた。  
「どうしたの？ 急に」  
「昨日ね、課長以上の人が集まって、プロセス改善への取り組み方についてミーティングしたんだけど、何人かの課長が、今、自分たちの所では、特に問題は起きていないので、下手に動いて混乱させたくない、と言うんですよ」  
「なるほど、よくあるパターンだね。彼らの部署では、本当に問題ないの？」  
「確かに、表面的には、ソフトの作業が遅れて

いるわけではないです。でも、それは、ハードの方で再設計が入ったりしているためで」「その影に隠れて、問題が見えなくなっているということ？」  
「そうです」  
「何を根拠に、そう判断するの？」  
「根拠といわれも」といって隣の人に助けを求めたが、隣の彼も、救いの船を出せない。  
この際に、窓際の客にコーヒーを届けるために、カウンターからちょっと離れた。

カウンターでは、2人で何やら話をしているが、解答を見つけた様子はない。  
2人の後ろ姿を見ながら、カウンターの中に戻った。  
「つまり、あなたたちの目から見て、いつも途中でハードの改修が行われるので、ソフトの作業の問題は表面化してないが、もし、ハードのプロセスが変わって、完成度が上がると、ソフトの問題が表面化する、と言うんだね」  
「そうです。でも、現実問題として、ハードの責任者も、“試作”無しでは作れない、と言うのです」  
「と言うことは、ソフトの部隊は、何も変える必要はない、ということだね」  
「そうなってしまいます」  
「これの何処が問題なの？」と意地悪してみた。



「良く分からないけど、何か変です。だって、他の部署では、ハードの部隊に専属のソフト要員が入って、ハードの開発スピードを上げようとしているんです。そのため、ソフト部隊も、必死になって開発のプロセスを見直しているのです」  
「そこに居るソフトの人たちは、必死になって勉強しているんだね。あなた達もその部署に居るわけだ」  
「どうして、部署が違うだけで、行動が違って良いことになるのでしょうか。もちろん、開発のテーマは違うので、必要な技術は違ってくるのですが、プロセスへの取り組みは、違わないと思うのです」  
「いい問題だね」といって、カウンターの下から白紙の紙を取り出して、彼の前に差し出した。  
2人は、何が始まるんだろうという顔をして、こっちを見ている。

「問題とと思っていることを書いてごらん」  
「問題を、ですか？」  
「そう、問題とと思っていることを書いてみて」  
「今は、支障が出ていないけど、それは、ソフトの作りがうまくいっているからではない、と言うことですよ」  
「いいよ、その通り書いてみて」  
彼は、少し大きめの字で、問題を書きだした。

「そこから見たことは何？」  
「何って？」  
「今は、問題無いんだよね」  
「はい、そうです」  
「じゃ、いつ問題になるの？」  
「将来です」  
「オーケー、そのまま、今と将来に分けて書いてみて」  
「ところで、将来は本当に問題になるの？」  
「いえ、分かりません」  
「おいおい、そんなに簡単に“分かりません”なんて言わないでよ」  
「すみません」  
「分かっていることは？」  
「分かっていることですか？」  
「そう、分かっていること」  
「それは、彼らが担当している製品のソフトの規模が大きくなったときですね」  
「オーケー、それを書いて。で、それだけかな？」  
「他にですか？ これ以外ですよ」  
と、彼はいま紙に書いた文字をボールペンで突いて、“これ以外”と呟いた。  
どうやら彼はまだ、私が紙に書かせた意味を認識していない。



その時、紙を覗き込んでいた隣の若い彼が割って入った。  
「将来となると、エンジニアもいつまでもそこに居るとは限りませんよね。特に、あの製品は、利益を上げているわけでもないし、この先はどうなるか分からないと思いますよ」  
「オーケー、良く考えついたね。それを紙に書いて。ところで、どうしてあなたがそのことに気付いたのかな？」  
「先輩が、こうして紙に書いていたから、横から一緒になって考えることが出来たように思います」  
ここで、ようやく“先輩”は、私の意図に気付いた。その証拠に、目が輝いている。

そして、  
「そうか、今の環境では問題にはなっていないかもしれないけど、1年後には彼らはどの部門に回るか分からないわけだ」と言うところに気付いた。それに、歩調を合わせるかのように、隣の若いほうが続けた。  
「そのとき、他に部署が既にプロセス改善に取り組んで居たら、彼らはそこで遅れを取ってしまいますよね」  
「いや、それよりも、一緒にやって行けないかも知れないよ」  
「どうやら、答えを見出したようだね」  
「はい、今は問題には成ってなくても、ソフトウェア開発のあるべき姿は追いつけなければならぬですね」  
「それと、管理者は、そこに居る人たちが、そのようなスキルを習得する機会を与える責任があるということもね」  
「マスター、それって義務がもしもね」  
「そうだね、それくらいの気持ちになってくれば、良い関係を築けるのさうだね」

たとえ、今は問題になっても、ソフトウェア開発の在るべき姿を追わなければ、チャンス失うことになる。

